

欧州視察報告＜ 8 ＞

視 察 項 目	教育・子育て施策
視 察 日 時	2016年11月10日（木） 午後2時00分～5時00分
視 察 先 名	ヴィートフェルスカ高校
説 明 者	校長 ミカエル・カールソン氏
担 当	岩隈 千尋、木庭 理香子

【はじめに】

スウェーデンは、福祉に手厚い国であると同時に教育にも大変熱心に力を入れている国である。今回の視察には、「教育・子育て施策」をテーマに据えており、また主権者教育について視察項目に設けていることから、日本語コースを持ち、日本に大変興味を持つ学生も多いというヴィートフェルスカ高校を訪ねた。主権者教育をはじめ、校長先生からは生徒会活動の取り組みや、日本語コースの学生たちに川崎市について説明したのち、日本の印象などについて話を伺った。

【スウェーデンの教育事情について】

スウェーデンでは、小学校から大学まで入学金や授業料は無料となっている。義務教育は小学1年生から、日本の中学3年生に当たる9年生までとなっており、給食費も高校生まで無料である。また、幼稚園年長に当たる学年を小学0年生と位置付け、新たな環境に向けての準備期間として配慮されている。

スウェーデンでは、小学4年生から本格的に英語学習が始まり、中学生以上は英語、スウェーデン語以外の第三外国語を学ぶようになる。日本との大きな違いは、テレビ番組がそもそも英語で放送され、スウェーデン語の字幕スーパーが出るという形式のため、子どもから大人まで流ちょうな英語を話すことができるということである。

またスウェーデンの高校は、私立学校が少なく、進学する際に入学試

験がない代わりに中学校の成績で進路が決まるため、スウェーデンの学生は中学生から、とにかく勉強に励むということである。

また、スウェーデンでは学生のうちから政党の青年部に関わるのが一般的であり、それも親から指示されて所属するというよりも、本人の意思により、自ら選び所属するケースがほとんどということである。また、アムネスティのように、難民救済や国際的な支援活動を行う人権擁護団体の活動に積極的に関わる学生も多いという。

【ヴィートフェルスカ高校の概要】

訪問したヴィートフェルスカ高校は、伝統を重んじ、知識を探求し、国際的にもレベルの高い教育を提供し、自発的に活動できる人材育成などをモットーに1647年に創立された。生徒は2,100名在籍し、ヨーテボリ市で最も大きな高校である。

ICTなど最新技術を取り入れた教育を実践している。また、音楽と数学の特進コースを目指す学生がスウェーデン全土から集まるという。その他、国際的にも活躍できる人材を育成するため、留学生も多く受け入れ、ドイツ語・フランス語の特進コースを卒業した学生は、ドイツ・フランスそれぞれの大学に進学できる資格を取得できる。日本語コースを第三外国語に履修する学生も多く、今年度は140名が在籍している。なお、国際的な人材育成の観点から日本での留学生受け入れ先を探した結果、私たちが訪問する約1週間前に北海道・滝川市にある滝川西高校と教育連携協定を結び、来年度から留学生を送ることになったということである。

学生が通うクラスには、英語で学ぶコースや「国際バカロレア」という世界共通の大学入試資格取得と、それにつながる教育プログラムを取り入れたコースもある。

【ヴィートフェルスカ高校

～生徒の自主性を高める取り組みについて～

スウェーデンでは、高校生が9万4千人おり、全国で約300か所の

高校全てに生徒会がある。生徒会は、学校ごとに取り組み方が異なり、学校からは独立した機関として位置づけられ、それぞれが大きな役割を果たしている。生徒会の活動を支援するため、全国規模の上部組織としての生徒会が存在しており、国からの支援金(年間2千2百万クローネ。1クローネは日本円にして約13円。2億8千6百万円/2016年11月末現在)を活用し、それぞれの生徒会が独立組織として機能しやすくするための経済援助や、講習会の実施、学校が快適になる取り組みなどを支援している。ここでは主に卒業生で構成される40名のスタッフが活動しており、市とも直接意見交換を行うなど「全国規模のリーダーを養成する場」ともなっている。そのため、政治家の多くはこの上部組織の生徒会に所属した経験を持っている。

ヴィートフェルスカ高校の生徒会は、委員長以下8名の学生で構成され、「学校生活を充実させる」「社会的責任がとれる人間を養成する」という目標を掲げ、3つの役割を果たしている。一つは、執行部とよばれ、年間の生徒会運営の方向性を定めるものである。

次は影響委員会への関与で、生徒会組織とは多少異なり、校長や教師もメンバーに加わり、生徒と課題を共有して取り組んでいる。例えば、使われていない校庭を駐車場として利用するなど、校内の活用方法の検討や、授業を1日休みにして授業と異なるテーマで話し合う機会を設けることもあるという。生徒からの発案で「性問題」について取り上げた時には、性の自由について話し合うと同時に、『自由』ということは、自分自身に責任があることを理解させ、責任ある行動を生徒に促す指導を行ったということである。

また、スウェーデンでは、学校内の環境に関して生徒から学校に働きかける権利が法律で保障されているため、影響委員会には、安全・環境オンブズマンという役割もある。これまで改善した例では、汚いトイレの改修や教室内の照明の改善、校内の温度やシャワーの温度の設定など細かいところにまで及ぶ。環境という点では、物理的な環境だけでなくメンタル面の環境もある。先にも触れたが、スウェーデンでは、入学試験がない代わりに学校の成績が非常に重要なため、生徒たちは常に勉強

に追われ、ストレスを抱える生徒も少なくないということである。そのことについて影響委員会で取り上げる以前は、試験と試験の間隔が短く、生徒が常にストレスにさらされていたことから、校長が教師に対し、試験間隔を空けるだけでなく、成績の判定にペーパー試験以外も取り入れることを指示し、生徒のストレス環境の改善を行った事例もあるということである。

このように影響委員会自体に決定権はないが、校長や教師も一緒に取り組むことで、改善策が着実に実行されるということが、この委員会の意義である。

3つ目に、エコノミー担当がある。ここでは、主にイベントを企画し生徒にとって学校が楽しくなるだけでなく、社会とのつながりについて学ぶ取り組みを行っている。例えば、生徒対象のパーティーやコンサートで得た売り上げ収入を社会貢献活動に寄付し、社会とのつながりを実感させることなどである。また、別のイベントでは、ストレス対策や、男女平等問題など生徒が関心ある内容で講習会を実施することもあるという。これらの費用は、学校だけでなく、先に述べた全国規模の生徒会組織からも支援を受けて実施するということである。

なお、2014年にヴィートフェルスカ高校の生徒会は、これらの活動や、学校との協力関係が評価され、スウェーデン国内で最優秀生徒会として表彰されている。



ヴィートフェルスカ高校の外観



ヴィトフェルスカ高校と滝川西高校の教育連携協定締結を伝える北海道の新聞記事



ヴィトフェルスカ高校の生徒会役員の生徒たち。左のアダム君は卒業生で、現在は生徒会上部組織で2校の生徒会を担当している。



ヴィートフェルスカ高校玄関前で、ミカエル・オー・カールソン校長・生徒会学生たちとともに



講堂には、卒業生の画家が描いた「人生を象徴する意味を持つ」大きな絵が飾られている。

【総括】

この視察項目を本市の実情と比較する意味で、本市の教育委員会に対し、高校での生徒会活動についてヒアリングを行った。

それによると本市の高校でも生徒会活動は活発に行われているという。例えば、文化祭や体育祭、卒業生を送る会などで競技内容やテーマなどの企画・運営を行い、それぞれのイベント用に学校から支給された予算の収支報告を行う。また、学校生活を活性化させるため、挨拶運動や地域の清掃活動、球技大会や募金活動などを生徒会の発案で行うこともあるという。講習会などは、学校が企画し提供するものであり、生徒から発案される機会もないということであった。しかし、これらは、私たちが学生の頃から続く活動内容であり、それが当たり前であるという認識でもあった。

ところが今回の視察で、スウェーデンでは学校に通う子どもたちには、法律で「学校の環境改善を生徒が学校に働きかける権利」が保障されていることにまず驚いた。そのため、学校側も生徒（生徒会）の発案を重視し、学校運営の決定権を持つ校長でさえ否定することが難しく、改善に取り組むためにできるだけの努力をするという点や、学びたい講演会を生徒会が発案し学校に働きかける点、生徒会の上部組織の存在とそこが有する莫大な予算、それを執行する組織力など、生徒会が運営するのは学生でありながら独立した機関として存在し、機能していることに非常に感銘を受けた。

ヴィートフェルスカ高校が、留学を希望する学生の受け入れ先を探しに探して、ようやく北海道の滝川西高校に辿り着いたということであるが、ぜひ本市の高校でも協定を結び積極的に交換留学を行い、本市の学生が自主性の強いスウェーデンから多くを学ぶ機会を創出したいと考えた。

またこれは、自治体レベルの話ではないが、スウェーデンでは、テレビ放送は基本的に英語で放送し、スウェーデン語の字幕スーパーをつけるため、国民の多くが流ちょうな英語を話せるということである。日本では、今後の国際化に向け英語を学習する学年を引き下げ、本市でも小

学5年生以上に対し英語の授業時間を増やす取り組みを実施しているが、残念ながら全体的には流暢な英語を話せる域に達していない現状がある。実態として本市では、英語を流暢に話せる教師による学習指導が十分に行われてはいないが、本気で生きた英語学習に取り組むのであれば、若年層から生の英語に触れる環境作りが必要なのではないかと強く感じた。

【ヴィートフェルスカ高校

～主権者教育・政治教育の取り組みについて～】

1 4時からの生徒の自主性を高める取り組みに係る説明に引き続き、1 5時から、ヴィートフェルスカ高校の社会科担当の教員2名（エリック先生とトーマス先生）に参加して頂き、授業を通じて、どのような主権者教育や政治教育が学校現場にて行われているかの講義を受けた。



社会科担当のエリック先生とトーマス先生

●社会科学習について

主権者教育は、社会科の時間に実施されているが、社会科の時間だけでなく、あらゆる科目において、生徒自らが自分自身の意見を持ち、社会的課題について認識できるような意識付けが行われている。

社会科については、(日本でいうところの) 学習指導要領が細かく設定されており、それに基づいて教員は授業を進め成績をつけることになっている。また、生徒に対して、何をどの程度学ぶかについても具体的な内容も示されている。

社会科の学習指導要領の中では、民主主義制度や人権について学ぶことが明記され、社会組織のあり方や歴史的観点、イデオロギーの問題、政治的・経済的な視点など多面的・多角的に教員が指導することが示されている。また、国レベルの問題だけでなく、地方自治の問題についても幅広く指導することが求められている。

●具体的な内容について

1. 「主権者教育のための討論会」

社会的課題を多面的・多角的に捉え、生徒と教員が一体となり主権者教育を構築するための手段として「討論会」が行われていた。例えば、政治的課題を扱う際には、「討論会」の場に政党からの代表者やその政党の青少年部の代表などが参加するような取り組みが行われていた。現職の議員を呼ぶこともある。「討論会」については、全校生徒とともに行うこともあれば、クラス単位で行うこともある。

2. 「政治教育のためのディスカッション（話し合い・議論）とディベート（討論）」

時事的なニュースや社会的な課題を取り上げ、生徒間同士でのディスカッション（議論）や分析が活発に行われていた。ディスカッションすることにより、生徒自らの頭で考え、諸課題について、多面的・多角的に議論する土壌を育てていた。これは、多様な意見を通じて、自らの考えを深化させることにも役立っている。

また、ディベートについても同様だ。ある課題について、賛成・反対の立場、利点や問題点について議論する。物事や事象を一面で捉えるのではなく、多面的・多角的に物事を判断し考察することができる能力を養う取り組みが行われていた。

エリック先生・トーマス先生、両名から強調されていたことは、「クリティカル・シンキング（批評的・批判的な考察）」の重要性についてだった。マスコミの報道の仕方については、一面的なもの

が見受けられるが、政治的な課題等については、生徒自らが批評的・批判的な目で物事を多面的の捉え判断できるような訓練を指導の主眼にしているとのことだった。

視察団には、先生方からヴィートフェスルカ高校の生徒たちが実際の社会科・主権者教育の中で使用している資料を頂いた。アメリカの大統領選挙が教材に用いられていたが、その内容については、極めてレベルの高いものだった。以下、参照。

○アメリカの大統領選挙について

アメリカの大統領選挙が最高裁判事の人事に与える影響は。

スウィング・ステート（激戦州）とは何ですか。

TTIP（EUと米国の自由貿易協定）とは何ですか。

トランプ氏とクリントン氏だけでなく他の候補者については。

3. 「青少年議会・模擬投票」

ヨーテボリ市には、「青少年議会」というものがあり、市総務局の行政職員とヨーテボリ市の各地区で選ばれた高校生たちが実際の市議会のように顔を合わせる取り組みがなされていた。

実際の市議会のように決定権があるものではないが、生徒たちの民主主義教育を醸成する一環として、青少年議会において本物の市議会のような議論や、やり取りを行っている。

また、青少年議会だけでなく、様々な行政機関や国会、EUの本部であるブリュッセルなどを訪問し、それらの活動を通じて公共政策や情報公開のあり方を学んでいた。

さらに、関係機関を訪問するだけでなく、その後は、（日本で言うところの）振り返り学習を行っていた。具体的には、生徒間同士で学んだことについて講義し合うなど政治的な知識や考察力を深化させる取り組みを行っていた。

「模擬投票」については、実際の国政選挙や地方議会議員選挙に合わせ、同様のことを実践していた。現職の議員や政党の代表者を

呼ぶこともあるそうだ。単に投票するだけでなく、実際の投票日の数日前に高校生が自らの考えや意思に基づき投票する。

開票は、実際の選挙後に行う。そうすることにより、高校生たちの選挙結果と実社会の選挙結果がどのようになっているのかを比較検討する取り組みが行われていた。本物の選挙と同様のことを実践することで、選挙や投票、そして各政党の公約など、政策についての理解を深めることを目的としていた。

最近の選挙における高校生の動向については、成人の場合は、保守から革新までふり幅が大きくないが、高校生たちの場合は、考え方が保守から革新まで極端に偏る傾向にある。それは、政党に対する投票行動でも同じであるし、個々の政策についても同じような傾向が見受けられる。

【質疑・応答】

Q 1 : 「討論会」について伺いたい。政治的な討論会の場においては、政党から代表者等を呼ぶこともあるという説明だった。そうすると、討論会の場では、政党の公約や政策などについてPRの場になる。高校生の場合は、政治的な知識が乏しいこともあると思うが、その場合は、高校生達はどのように政党の公約や政策を判断したり理解したりするのか伺いたい。

A 1 : 各々の公約や政策についての理解は生徒に任せるしかないが、教員が指導者として最も注意していることは、できるだけ多くの視点が入り入れられるようにすることに留意している。また、「討論会」に呼ぶ政党の代表者たちについては、ヴァートフェルスカ高校の価値観に合う政党の代表者しか招くことはできない。

Q 2 : 多面的・多角的な視点を養うという点において、マスコミ報道の説明があった。時事的なニュース報道の分析も授業の中で行っているということだが、マスコミ報道において、物

事の一面のみを報道するようなケースも見受けられる。スウェーデンの生徒たちは、どのような訓練を行っているのか伺いたい。

A 2 : マスコミは、ニュースを報道する際に、中立性と言いながらも一面的な部分しか報道していないこともある。だからこそ、「クリティカル・シンキング（批評的・批判的な考察）」が重要となる。学校は、教育の場なので、生徒たちに批判的な視点を身に着ける訓練をするために、ディベートを通じて自分の意見とは異なる視点に立ち、発言させることもある。

Q 3 : 社会科の学習の中で、様々な社会的・政治的課題を議論するということだが、どれぐらいの時間をかけて行うのか伺いたい。

A 3 : 取り扱うテーマによって異なるが、現在行っているイデオロギーの議論については5週間かけてやっている。先に話した、マスコミの報道の分析などは年間を通じて行っている。色んな方法があるが、社会科だけに捉われず、社会科と英語の融合など、様々な教科を組み合わせる授業を行うこともある。

Q 4 : 先日、ドイツの連邦議会を訪問した。偶然にもベルリンの壁が崩壊した記念日だったが、まさにその日にアメリカの大統領選挙の結果が判明した。国際情勢が刻々と変化する中で、主権者教育や政治教育はどのように対応しているのか伺いたい。

A 4 : ニュースに関しては、その時々々の時事ネタを年間を通して扱っている。その中において、教員が留意していることは、刻々と変化する状況の中で、生徒たちがきちんと学ぶべきことについて学んでいるのか？自分の頭で考え自らの意見を述べることができるような教育が行われているのかについてで

ある。また、重要視していることは、生徒たちが自分たちの能力を向上させているかというところである。

Q 5 : クリティカル・シンキング（批評的・批判的な考察）について。いきなり高校に入学してクリティカル・シンキングが身に着くとは考え難い。やはり、小学校・中学校からの経験が大きいと思うが、小・中と高校との連携について伺いたい。

A 5 : ご指摘の通りだ。いきなり高校に入学してクリティカル・シンキングが身に着くわけではない。小・中学校でも一貫して主権者教育や政治教育の場において、クリティカル・シンキングを養う教育や訓練を行っている。そのことについては、実際の科目として設定されているわけではないが、学習指導要領にクリティカル・シンキングの取り組みについて明記されているので小・中学校でもその取り組みが徹底されている。

Q 6 : これまでのスウェーデンを担ってきたのは、スウェーデン社会民主労働党（S A P）や穏健党など、ある程度、基本的な国のあり方について合意があった政党だと思うが、昨今、スウェーデン民主党のように極右政党の台頭がある。このような偏った考え方の政党への対応はどのように行うのか伺いたい。

A 6 : 基本的には、スウェーデン民主党のような政党に対しても扱いは同じである。実際、2014年に行われた国政選挙の際にも、本校にスウェーデン民主党の代表者を呼んでいる。スウェーデン民主党は、移民政策について極端な意見を持っている。国政選挙の際の討論会の時には、本校の生徒からかなり批判的な目で見られていた。繰り返しになるが、生徒たちがクリティカル・シンキング（批評的・批判的な考察）を持つことは大変重要なことである。スウェーデンには、ナチ政党もあるが、彼らは本校の価値観に合わないので呼んでい

ない。最終的な決定者は、校長先生の判断となる。正直なところ、スウェーデン民主党を招くことについては、かなりハードルの高いことであった。



主権者教育・政治教育については、関連な質疑が交わされた。

【総括】

スウェーデンの主権者教育・政治教育については、日本の教育と異なり知識の詰め込み型ではなく、生徒自らが考える力を養う教育がなされていた。また、社会的課題に対し多面的・多角的な視点を醸成するためにクリティカル・シンキング（批評的・批判的な考察）の重要性が説かれていた。

スウェーデン人は、日本人と同じくシャイで公の場で自己主張することを躊躇するような国民性だ。そんなスウェーデン人であるが、主権者教育や政治教育の場においては、積極的に自らの意見を構築したり、フィールドワークとしてアムネスティインターナショナルや難民施設などで働くなど、生徒一人ひとりが主体的に社会を意識し行動するような取

り組みに繋がっていた。そうすることで、最終的に国民の義務であり、自らの権利を主張するための手段である選挙に関心を持ち、結果として投票することがあたり前の社会となっていた。

我が国においては、2016年の参議院通常選挙より18歳に選挙権が拡大したが、各学校における主権者教育・政治教育については、いまだ発展途上と言えるであろう。

主権者教育については、9月、12月の定例会において、川崎市議会から行政当局に質疑を行っている。

その際に、教育委員会からは総務省・文部科学省が発行している「私たちが拓く日本の未来」という主権者教育の指針となる副読本を教員や生徒に配布していることや、選挙管理委員会からは模擬投票についての答弁があった。

しかし、主権者教育や政治教育については、関係各局による役割分担や連携が図られていない現状がある。また、授業時間数についても十分確保できていない状況だ。国や川崎市が作成したマニュアル本があるものの、それが実際の学校現場でどのように活用され具現化されているかは不透明なところがある。

一足飛びに、ヴィートフェルスカ高校のような主権者教育や政治教育を行うことは困難かもしれないが、まずは、本市の教育委員会がより主体的かつ体系的に主権者教育のカリキュラム構築に取り組む必要があると考える。

年々低下する投票率に歯止めがかからないが、ヴィートフェルスカ高校で学んだことを、本市の小・中・高における主権者教育の場において還元していきたい。

【ヴィートフェルスカ高校

～日本語コースの生徒たちとの交流～】

ヴィートフェルスカ高校には、日本語を履修している高校生が多く存在した。今回、視察の事前打ち合わせをしている段階より、視察団と日本語コースの生徒たちとの交流や意見交換を学校側より打診されていたため、多文化交流の一環として快く承諾した。

まず、視察団副団長である織田議員より今回の視察概要と川崎市議会について、また、自治体としての川崎市をテーマに多岐に渡るプレゼンテーションを行った。その後、高校生との意見交換に臨んだ。



スウェーデン語と英語でのプレゼンテーションに臨む織田議員

意見交換では、「なぜ、日本語を学ぼうと思ったのか。」「日本について関心のある事は。」といった視察団からの問いかけや、「視察団のみなさんは、武道ができるのか。」「スウェーデンの名物料理を食べて行って欲しい」など、最初は、緊張した面持ちだったが有意義な意見交換が行われた。



スウェーデンの高校生たちは、日本人と同じくシャイなところがあった

高校生たちが、日本語を学習するきっかけとなったのは、個人個人によって様々であったが、やはり、アニメやゲーム、カワイイ文化といったことが大部分を占めていた。また、日本の著名人としては、アニメの原作者の名前が多く挙げられていた。

ヨーテボリ市は、スウェーデン第二の都市（人口約55万人）であるが、担任の先生曰く、あまり日本人は住んでいないとのことだった。それ故、高校生たちは、なかなか日本人と直接日本語で会話をする機会に恵まれていなかった。今回、視察団との意見交換を通じて生の日本語に触れあう機会が設けられたことに感謝の意を表された。

